「天正少年使節」
――スペイン史料からの再考――

滝澤　修身（長崎純心大学、日本）

ありがとうございます。それでは、報告の方を始めさせていただきます。

今、伊川さんに、イタリアに残存する史料について、幅広く報告していただきました。これで使節団の旅の全景がよく見えてきました。私は、スペインに12年半程滞在しました。この間に、イエズス会の史料やスペイン系托鉢修道会の史料を収集しました。日本のキリシタン学を見ますと、ポルトガルとイタリアに残存する史料、特にローマのイエズス会の本部が史料研究の対象とされています。この両国の史料研究が非常に進んでいて、スペインの史料はあまり注目されていないのではないかと感じます。先ほど、伊川先生のお話しの中で天正少年使節団の旅程を地図で示していただきました。私はスペインにいたことから、スペインの史料から天正少年使節団を捉え直すとどのような結果になるのかということを、少々考えてみました。

当時のスペイン国王はフェリペ2世でした。彼は、「陽の沈まぬ国の王で、世界帝国」を築いていたわけです。実際、フェリペ2世は、ある意味ではローマ教皇に匹敵するほどの力を持っていたと考えられます。そういう訳で、スペインの史料を読み解いていくと、このフェリペ2世という国王の影響が、かなり色濃く表れてきます。

私のレジュメに関してお話しします。最近、国際日本文化研究センターの稲賀繁美先生が編者として『映しと移ろい』という本が出版されました。その中に、私の論考「『天正少年使節』スペイン史料からの再考」が収録されています。今回の報告会では、この論考を読みながら、「スペイン史料から天正少年使節団を捉え直すと、どのようなことが見えてくるのか」ということをお話ししていきたいと思います。

それでは、導入部分から見てゆきます。天正少年使節団は、1582年に巡察師ヴァリニャーノによって計画されたものです。4人の少年が、九州のキリシタン大名である大友宗麟、有馬晴信、大村純忠の名代としてローマに派遣されます。正使を務めたのは伊東マンショと千々石ミゲル、副使は中浦ジュリアンと原マルチノでした。4人の少年は1584年2月にローマに着き、教皇グレゴリオ13世に謁見を賜ります。その数日後、グレゴリオ13世が帰天したために、新教皇シスト5世の戴冠式に参加することになりました。彼らはヨーロッパ各地で大歓迎され、日本のイエズス会の活動実績を印象付け、日本に対する強い関心を呼び起こしました。天正少年使節団は、ポルトガルのリスボンからスペインのマドリードを通過し、イタリアのローマに到達し、ローマ教皇グレゴリオ13世の謁見を賜ります[1]。

ローマ教皇の少年たちへの謁見の様子があまりにも華やかであったため、この少年使節団に関する研究は専らイタリア人研究者による、イタリアの研究を中心に行われてきました。先ほどの伊川先生のご報告で、イタリアの史料の残存数がどれほど多いかということがよく理解できたと思います。その代表的な研究者がアドリアーナ・ボスカロです。彼女は『1585年の日本使節団に関するマルシアナ図書館蔵未完史料』（1985年）、『ヨーロッパへの最初の日本使節団のベネチア報告』（1961年）などの著書を出版しています。

このようにヨーロッパ的な規模で見ますと、天正少年使節団に関する研究は専らイタリアに依存しています。唯一のスペイン人による研究は、1977年に出版された、ホセ・ギジェン・セルファの『ヨーロッパ・ムルシアにおける最初の日本使節（1582年―1590年）』のみです[2]。

少年たちは、スペインのマドリード近郊で、陽の沈まぬ帝国の統治者であるフェリペ2世に謁見を賜ってい

---

(1)　朝尾直弘『日本史辞典』、角川書店、1996年。

(2)　Osami Takizawa, La Delegación Japonesa Enviada a Roma (1582-1590) según las Fuentes Españolas, Boletín de la Real Academia de la Historia, Tomo CCVI. Cuaderno II, 2009, Madrid.

ます。先ほども申しました通り、当時のフェリペ 2 世は、ローマ教皇に匹敵するほどの勢力を保持していました。彼の勢力を示すかのように、スペインの王立歴史学学士院やシマンカス古文書館には、本使節団に関わる幾つかの史料が保管されています。しかし残念なことに、スペイン本国では、本使節団に関する研究は、ほぼ皆無であるのが現状です。こうした事情を考慮し、私は、2009 年にスペイン王立歴史学学士院の紀要に「スペイン史料から見た天正少年使節団　1582 年から 1590 年」という論文を寄稿しました。今回はこの論文を日本向けに編み直してみました。編み直す際には、伊川先生が 2017 年に出版された『世界史の中での天正少年使節団』を読み、参考にさせていただきました。ですので今回、このように伊川先生と同席させていただく機会を得ることができたのは、誠に幸せなことです。

私は、このたび研究に新たなる視点を設けてみました。第一に、天正少年使節団に関する残存史料を、スペインという観点から分析する。第二に、天正少年使節団に至るまでの歴史的前提条件を、スペインに軸を置いた上で、簡潔にまとめる。第三に、天正少年使節団のヨーロッパの旅を、フェリペ 2 世による「おもてなし」という観点から描き出す。後ほど、次第にこの第 3 にかかげた「おもてなし」の意味が分かっていただけると思います。あと第四に、天正少年使節団の持ち帰った印刷機が辿った運命を取り挙げる、ということです(3)。今回の報告では、時間の制限もあることから、第三の観点のみに焦点を絞り話をさせていただきます。

以前、スペイン語の文献リストを作成したのですが、今回は発表の時間もあり、重要な史料についてのみお話しします。スペインの史料は、王立歴史学学士院のコルテス部門の 9 の 2663 番、イエズス会部門 23 番、シマンカス王立古文書館の整理番号 945 番、1341 番、1551 番として保管されています。

スペイン語の史料としましては、ベルモンテの学院長であったルイス・デ・グスマンが『東方布教史』という著作を、1601 年から 1602 年の間にアルカラで出版しています。この本の中で、少年使節団の動向が明かされています。それと、先ほど伊川先生が言及された、東京大学史料編纂所編、『大日本史料』第 11 編、別巻 1 から 2 にかけても使節団に関する史料が収録されています。また結城了悟（ディエゴ・パチェコ）神父が史料を収集し、それは『新史料天正少年使節』という本で紹介されています。この本の中には、これまで天正少年使節団の研究には使用されてなかった史料も、幾点か保存、収録されています(4)。

私は、日本に帰国後、スペインから、「どこどこの市役所で天正少年使節団に関わる史料が出て来た」というようなお話をいただきます。天正少年使節団が辿った道のりに、史料が残されているのですね。これから、そのような史料がさらに発見されると、使節団に関する研究が益々発展してゆくだろうと思います。

天正少年使節団に関わる歴史的前提条件は、レジュメをお読みください。それでは、本題に移りましょう。最近は日本でも、「おもてなし」という言葉をよく使用しますが、16 世紀のスペインにも、やはり「おもてなし」の習慣はあったのですね。この習慣は、スペインでは中世から近代、そして現代に至るまで形作られていると思います。王室は、「おもてなし」に重点を置いていたはずです。私は、史料を読みすすめるうちにフェリペ 2 世の「おもてなし」という観点から天正少年使節団研究を捉えてみたら面白いのではないかと思いつきました。

スペイン側の史料を読み込むと、スペイン国王フェリペ 2 世の「おもてなし」とも呼べる細やかな心遣いが見て取れます。同王の「おもてなし」によって、天正少年使節団がヨーロッパを巡る旅を続けてゆけたという点が見えてきます。

今まで読んだ史料の中から、フェリペ 2 世の「おもてなし」とも言える箇所に、線を引いてみましょう。まずはポルトガルの旅から見てみようと思います。

長崎を出帆した天正少年使節団は、インド洋喜望峰を通り過ぎ、1584 年 8 月 10 日にはポルトガルのカスカイスに到着します。その後、リスボンに 20 日間滞在します。最初にシントラの宮殿を訪れます。王宮では、スペイン王家からポルトガルの統治を任されていたアルベルト・デ・アウストリアに謁見をします。ここには、フェリペ 2 世が前もって枢機卿と連絡を取り、少年たちを快く迎えようとした意図が働いていたと思います。

---

(3)　稲賀繁美編『写しと移ろい　文化伝播の器と触変の実相』、花鳥社、2019 年、37 ページ。
(4)　前掲書、37 ページ。

こうして、「おもてなし」による旅が始まりました。その後、天正少年使節団はスペインに入国します。

レジュメに書いてある通り、天正少年使節団に実際に会ったベルモンテのイエズス会学院長のルイス・デ・グスマンは、『東方布教史』の一章に「天正少年使節団」のことを書き記しています。本書の原典は、マドリードの国立図書館に所蔵されています。本書の記述に従うと、天正少年使節団は、主にグアダルーペ、トレド、マドリード、エル・エスコリアル、アルカラ・デ・エナレス、ビエホ・デ・フエンテス、ベルモンテ、ムルシア、オリウエラ、エルチェ、アリカンテ(5)を通過しながら旅したと記されています。次にこの旅の中で見受けられる、フェリペ2世の少年たちへの「おもてなし」と言える箇所に注目してみましょう。

マドリードでは1584年11月14日に天正少年使節団とフェリペ2世との謁見式が行われます。使節団は、国王、皇太子、内親王らが着席した所にまかり出て、伊東マンショが、まずヨーロッパ風に国王の手に接吻しようとします。この時、陛下は手を差し伸べられず慈しみと喜びの表情をもって、かしずいたマンショを立ち上がらせ、「久しく抱擁の挨拶をした」ということです。これは、驚くべきことです。当時の国王が抱擁の挨拶をするということは、まず、普通ではありえなかったことです。この破格の礼を、続く他の3名の少年にも、随身の日本人に対しても同様にしましたので、そこに居合わせた随身たちは、非常に驚いたということです。その後、フェリペ2世がマンショに色々質問しました。特に、マンショの和服に非常に興味を持ちました。メスキータが、「衣服も破損してるし色も褪せている」と国王に進言しますが、国王は、「そのようなことはない、大変立派だ」と言い、刀や手袋を手に取り、袴の後ろの腰当てを珍しがったと言います。また、国王は、草履にも興味を抱きました。そこで、マンショは国王の気持ちを察し無造作に片方を脱ぎました。すると国王自らがこれを取って、底がなめし革か生革か調べました(6)。このように、フェリペ2世は、天正少年使節団に対し、大変な興味を示しつつ、細かい思いやりを示していたわけです。

その後、少年使節たちは陛下に献上品を進呈します。竹製の文机、漆塗りに金箔を施した手洗いの木鉢、細かい細工がなされた籠でした。伊東マンショと千々石ミゲルは、大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の名代として、日本語で挨拶をしました。この日本語の発音が非常に面白かったので、スペインの王室の中には、笑いが起こったそうです(7)。さらに、フェリペ2世は、日本語は右から下の方へ読むことを知って、非常に驚いたというような記録も残っています。謁見式の後、メスキータ神父はフェリペ2世に、少年たちが母国の日本でスペイン国王の強大さとその富を語り伝えるために、特別に配慮してもらおうと誓願します。

そうするとフェリペ2世はこれを許可し、2か月前に完成したばかりのエル・エスコリアル宮殿や、マドリードの王宮付属の武器庫へ案内させることにしました(8)。こうして、少年使節団はエル・エスコリアル宮殿に召し出されます。訪問日に、使節たちは着物姿で宮殿に現れましたので、人々は大変な興味を示しました。宮殿の中では、多くの部屋を通過し、フェリペ2世の王子、王女たちの待ち受ける部屋に到着したところで謁見式が挙行されます。使節団は領主から渡された書簡を自ら日本語で読み上げました。使節たちはフェリペ2世の寛大さに感謝し、日本人キリスト教徒への保護を求めました。これもルイス・デ・グスマンの書に、記録されています(9)。

その後、使節団は、宮殿の庭や修道院文庫、薬剤室、食堂、聖堂等を見学します。ジョルジュ修道士は、使節団の訪問日、出どころ、目的、フェリペ2世に対する謝辞を紙に書いて、廷臣に渡しました。その夜、晩餐会が行われました。音楽が流れる宴会場であったと言います。少年たちは3日間、エル・エスコリアル宮殿に宿泊します。それから、少年たちはマドリードに戻り、王室の武器庫を見学することになります。

その後、少年たちはイタリアへと旅を続けます。まず、スペイン東方の地中海へと移動することになります。

---

(5) B.N.M.R-16116. Luiz de Gusmán, Historia de las Misiones, II, Alcalá, 1601-1602.

(6) Luis Frois, Tratado dos Embaixadores Iapões, p.113. Naniello Bartoli, Dell'Historia della Compagnia di Giesv il Giapponne. Seconda Parte Dell' Asia. Roma M.DC.LX. p. 90. Letter from the Provincial of Toledo to the General of the Company of Jesus, December 17, 1584.pp. 129-130.（大日本史料、第11編別巻之1）

(7) Ibídem, pp. 121-122.

(8) 松田毅一、『天正遣欧使節』、朝文社、1991、109ページ。

(9) Luiz de Gusmán, 1601-1602, pp. 237-239.

ここで、スペイン国王のフェリペ 2 世の「おもてなし」が発揮されます。少年使節団がマドリードを出発する前に、フェリペ 2 世は、カルタヘナとアリカンテの海軍長官、そしてローマ大使のオリバレスに手紙を認めています。先ほどの伊川先生のお話しにもあったように、ローマにはスペインの大使がおりましたので、彼らの書簡が残されいるのです。そういった書簡を見ますと、少年たちの旅がうまく進むようにフェリペ 2 世が細やかな指示を出してるのが分かります。

例えば、ルイス・フロイスの、『遣欧使節行記』の中に収録されている史料では、国王からカルタヘナに宛てた手紙があります。

> 「カルタヘナにある我が軍隊の長官並びに監察官へ。本年、日向の王の孫ドン・マンショ、有馬の王の従弟デ・ドン・ミゲルおよびドン・ジュリアンとドン・マルチノが、イタリアに行く目的でカルタヘナへ赴く。彼らに以下の取り計らいをするように命ずる。彼らと随行員を快く迎え、十分に気配りし、持ち運んでくる衣服などを遅れることなく通過させること。もしカルタヘナにイタリア行きの船が停泊してるならば、彼らを乗せ、我が名において、航海に必要な物資を提供し十分なる心遣いをなすことを命ずる。マドリードより[10]。」

このような手紙を書いております。

次は、ムルシアへの手紙です。市長ドン・ルイス宛に書いた手紙には、

> 「ムルシア、ロルカ、カルタヘナの諸市、市長ドン・ルイス・アルティガよ。日向の王の孫ドン・マンショ、有馬の王の従弟ドン・ミゲルおよびドン・ジュリアンとドン・マルチノが、本年日本よりやって来た。ローマへ行く目的でカルタヘナへ赴く予定である。朕は貴下に対し、彼らを十分に配慮し随身員にも好遇を与え、彼らの衣服を遅滞することなく通過させることを依頼する。またカルタヘナにある我が艦隊の長官に対しても、同様のことを依頼する書簡を書くことにした。カルタヘナの港にイタリア行きの船があるならば、彼らを乗船させ、航海に十分な物質を提供することを命ずる[11]」

と記されています。

さらに、マドリードの北にあるシマンカスという町に、古文書館があります。この古文書館には、「スペイン国王よりローマ駐在大使オリバレス伯爵へ」という手紙が残されています。その内容は、以下の通りです。

> 「我が親族で顧問会の議員そして大使である伯爵よ。日向の王の孫ドン・マンショ、有馬の王の甥ドン・ミゲル、ドン・ジュリアンおよびドン・マルチノがキリスト教に改宗しスペインに渡ろうと考え、イエズス会の神父数人とともにスペインに到来した。少年たちは、神父の 1 人と一緒にローマへ行き、教皇の御足に接吻しようと考えている。少年たちは日本に帰り、彼らに与えられたこの好機を喜び、他の者たちが少年たちを真似るように、何か必要であったときは、彼らに援助を施し、名誉を与え、好意を示し、教皇庁でも十分な好遇を与えることを命ずる。この待遇は彼らの身分、そして彼らが良き道を選んだことに報いるために当然のことである。少年たちが無事ローマに着き、教皇たちが彼らの待遇に恩恵を与えたという報告を待とう[12]」

このように、フェリペ 2 世は、少年たちの行く先々で、旅が滞りなく進むように、細かく指示を出している。

ここから、イタリアの旅が始まります。天正少年使節はローマで新旧 2 人の教皇に謁見を賜った後、マント

⑽ Luis Frois, Trarados dos Embaíxadores Iapões;『大日本史料』、11-1、12 ページ

⑾ Luis Frois, Trarados dos Embaíxadores Iapões;『大日本史料』、11-1、128 ページ

⑿ Archivo de Simancas, Sección 6. Secretaría de Estado. Estado Roma. Legajo 945, Carta de Felipe II al Conde de Olivares en Roma (Madrid 24-11-1584), f.1.

ヴァを経てミラノへと旅します。イタリアの旅でも、フェリペ2世の「おもてなし」は遺憾なく発揮されます。フェリペ2世が事前にミラノに連絡を取っていたことから、使節団のために盛大な歓迎式が行われます。使節団が街に入る前から、侯爵の2人の息子、侯爵の孫、行政官、さらには500名の騎兵が、少年たちを待ち受けていました。この日の夜、使節団はイエズス会の宿舎に泊まります。翌日には多くの客人たちが使節団を訪ねてやって来ました。ノヴァーラ司教、トルトーナ司教、アヴォアの侯爵、バヴィエラやベネティアの大使たち、フェッラーラの騎士たち、侯爵の甥などの有力者たちでした。ミラノ市民たちは、使節団を幾つかの教会修道院、宝物殿、タペストリー工場、絹織物工場、武器工場、金細工工場に招待しました[13]

最後に、天正少年使節団は、再度スペインへ戻って来ます。彼らは、順風に乗って、8月17日に、バルセロナに到着します。この地で中浦ジュリアンが病気にかかり、彼らは1か月ほどこの町に滞在しました。バルセロナを出立する前に、使節団はモンセラート修道院を尋ねました。このモンセラートは、大変険しい岩場にあります。ここは聖母の霊地であり、ヨーロッパでも最も有名な寺院の一つです。この時期に、フェリペ2世が使節団をモンソンに招きましたので、彼らはそこへ向かいました。モンソンでは、国王フェリペ2世がマドリードで初めて使節に会った時のように、喜びの意を示し彼らを抱擁しました[14]。そして、使節団に旅費を提供しました[15]。その後、使節団はモンソンからサラゴサに向かいました。この街では、ピラール聖堂、諸天使の教会、サン・ヘロニモ教会を訪ねました[16]。その後、一行はアルカラ・デ・エナレスに移動します。ここには、アルカラ・デ・エナレス大学という大学があります。使節団は、実際に学位式に参加したという記録が残されています。一方、マドリードでは、彼らよりも先に到着していたフェリペ2世と女王が、使節団を今か今かと待ち受けていました。けれども、使節団のマドリード滞在はほんのわずかなものでした。

さて、まとめに入りましょう。現在までの天正少年使節団ではあまり使用されてこなかったスペイン史料を中心に、フェリペ2世の「おもてなし」という観点から使節団の旅を捉え直してみました。その結果、今までとは少し違った使節団の旅の側面が見えてきたのではないでしょうか。先ほど述べました通り、フェリペ2世は、少年たちと出会った時に握手をし、彼らを直接抱擁しました。これは非常に珍しい行為であったため、随身たちも非常に驚いたそうです。それだけではありません。フェリペ2世は、使節団が向かう都市の市長や行政長官たちに必ず事前に書簡を送り、彼らを歓待すること、旅の費用や物資を提供することを細かく指示しています。このようなフェリペ2世の優しさのこもった心遣いの上に、少年使節たちのポルトガル、スペイン、イタリア旅行は成り立っていたのです。

私からの報告は、以上です。ご清聴いただき、ありがとうございました。

---

⑬ Luiz de Gusmám 1601-1602, pp.283-285.

⑭ Daniello Bartolli, Dell'Histria della Compagnia di Giesv. Il Giappone seconda Parte dell'Asia. Roma. M.DC.LX. p.8.

⑮ Luiz de Gusmán, 1601-1602, p. 289.

⑯ Ibídem, p. 291.